

日本医学会分科会としての過去5年間の活動

I. 医学および医療の水準の向上への貢献

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

(てんかん学の向上への貢献)

日本てんかん学会(JES)は、学会誌「てんかん研究」発行や年次学術集会開催を通じて、国内外先端研究の発表の機会を設け、てんかん学の発展を促してきた。また、若手研究者による優れた国際誌発表論文を表彰しててんかん学研究的活性化を図るとともに、JES Sponsored Award により、若手会員の海外留学を支援している。

大規模な多施設共同研究が必要な新規抗てんかん薬の有効性・安全性評価やてんかんに対する非薬剤治療(迷走神経刺激療法、食餌療法など)の有効性・安全性評価では、これを主導または支援している。

さらに、2017年「てんかん学用語辞典」を改訂・出版し、2017年「国際抗てんかん連盟改訂てんかん分類、てんかん発作型分類」日本語訳を作成して、てんかん学・てんかん診療における用語の統一を図った。

(てんかん診療の向上への貢献)

JESは、学会認定専門医や学会認定教育施設の審査・認定を行い、てんかん専門診療の質を担保している。2020年「てんかん専門医ガイドブック改訂第2版」を出版し、専門医レベルの診療指針を示した。さらに、重点的なてんかん専門診療の標準化と均霑化のため、包括的てんかん医療施設認定基準を策定し、2020年から認定を開始した。また、2020年「定位的頭蓋内脳波実施に関する指針」や2020年改訂「迷走神経刺激療法資格認定基準」など専門的診療手技における資格認定基準の作成・審査を行っている。

より一般的なてんかん診療レベルの向上にも貢献すべく、日本神経学会監修「てんかん診療ガイドライン2018」の編集を実質的に担当し、標準的てんかん診療の指針を示した。JES年次学術集会やJES地方会の各集会では、てんかん学研修セミナーを通じて、標準的てんかん診療の普及を図っている。

国外で開発され国内への早期導入が必要な各種抗てんかん薬やてんかん治療機器については、JESが積極的に主導して行政への要望書等を提出している。また、抗てんかん薬の適応拡大や供給体制の改善についても同様である。

JES年次学術集会やJES地方会の各集会では市民公開講座を同時開催して、てんかんに関する一般への啓発も積極的に行っており、当事者団体である日本てんかん協会ともさまざまな側面で密接に連携しててんかん診療の向上を図っている。さらに2018年「職場におけるてんかんと障害のあるアメリカ人法に関するQ&A」の和訳、2019年「ドイツ法定労災保険てんかん職業評価改訂版」の和訳など、てんかん患者の就労支援資材を作成公開した。てんかん診療向上のさまざまな側面において厚生労働省の担当部署と連携し、さらにてんかん患者の自動車運転に関する問題については、警察庁と共同で大規模調査を行うなど、行政とも連携している。

b. 当該領域における国際的な役割

(国際てんかん抗連盟における役割)

国際てんかん抗連盟(ILAE)加盟 150 国のうち JES は米国について会員数の多い国である。ILAE では、さまざまなタスクフォースを通じて、てんかん学やてんかん診療における指針を作成・提案しているが、これらのタスクフォースには日本からも各領域の専門家が参加している。また、ILAE は、2015 年世界保健機構(WHO)総会「てんかんに対する決議」や 2020 年 WHO 総会「てんかんに対する行動指針作成実行」の採択を推進したが、JES は外務省への働きかけなどを通じてこれを支援した。

(アジアオセアニア地区における役割)

JES は、IALE アジアオセアニア支部(ILAE-AO)の一員として、研究教育診療や組織運営に積極的に関わり多大なる貢献を続けている。2021 年までの 4 年間は JES 理事長が IALE-AO 支部長を兼ね、複数回のてんかん学教育セミナーや啓発活動を行った。また、2021 年「アジアオセアニアてんかん会議」を主催し、アジアオセアニア地区におけるてんかん学やてんかん診療における最新の知見の交換を促進した。

JES は、毎年 JES Scholarship を通じてアジア地域からの留学生を受け入れ、アジア地域のてんかん診療の向上に貢献している。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

てんかんには患者への差別の歴史があり、社会へのてんかん啓発とてんかん患者のステイグマ解消はてんかん診療における大きな課題である。JES によるさまざまな啓発活動や患者・家族・ケア者への指針作成・教育活動は、社会のてんかんに対する理解を高め、患者のステイグマ解消に貢献している。

本来受けられるべき適切な診療へ到達できない「Treatment Gap」は、特に発展途上国で問題とされるが、日本でも地域格差を含め Treatment Gap が存在している。JES のてんかん診療均等化へ向けたさまざまな活動は Treatment Gap の解消に貢献している。

さらに、JES はてんかんのさまざまな側面に関する実態調査を通じて、行政施策や法的規制に資する重要な基礎資料を作成しており、てんかん診療全般や社会全体の安全向上へ向けた貢献も行っている。

d. 学会運営上留意している点

JES は、小児神経科、脳神経内科、脳神経外科、精神神経科、基礎医学領域、メディカルスタッフなど、複数診療科や領域で構成される。そのため、すべての会員へ公平な情報や機会提供がなされるよう留意している。また、当事者団体の日本てんかん協会とは定期的会合や共同活動を通じて協力体制を維持すべく留意している。

II. 他の分科会との連携による活動

- a. 日本脳神経外科学会：てんかんの外科治療に関する実態調査や保険改定要望、治療手技における資格認定、早期導入が必要な医療技術の導入申請などで連携している。
- b. 日本精神神経学会：診療ガイドライン編集、シンポジウムやワークショップの共催で連携している。
- c. 日本小児神経学会：ACTH 療法や食餌療法に関するガイドライン作成、新規抗てんかん薬承認への要望などにおいて連携している。
- d. 日本神経学会：てんかん診療ガイドライン作成、教育ビデオ作成、生涯教育セミナーや学術大会シンポジウム開催などで連携している。
- e. その他：日本産婦人科学会と「てんかんと妊娠・出産」に関する啓発で連携している。

III. 日本てんかん学会から日本医学会への期待・要望

てんかんとてんかん発作の分類については、2017 年の ILAE 新分類が世界的に用いられます。JES では新分類の日本語訳を作成し、普及に努めております。日本での新分類の普及につきましてご協力いただきますよう、お願いいたします。